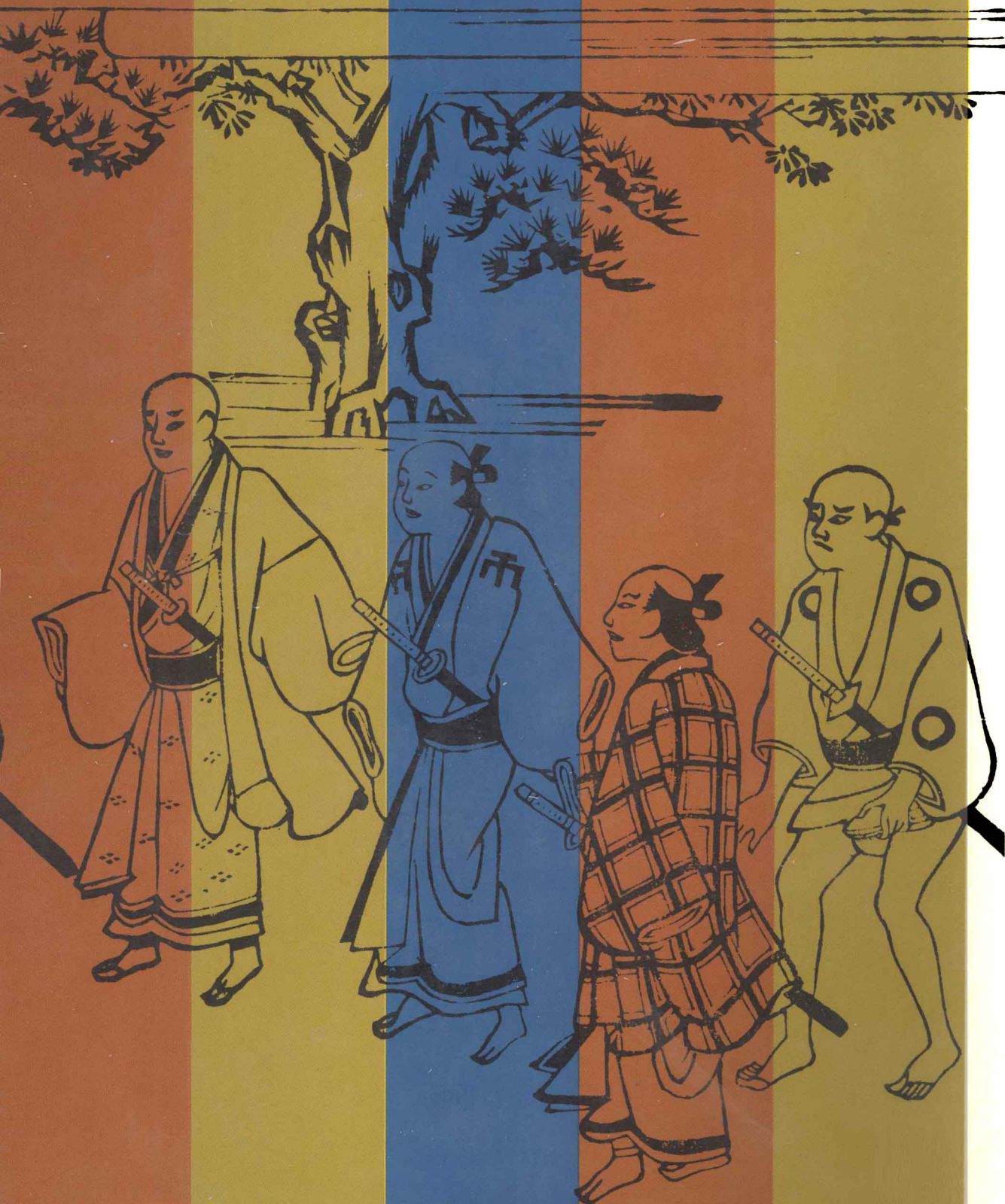


図説 日本
の古典

15

井原西鶴



図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学芸院大 学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学芸院大 学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授	小島環禮	奈良国立 博物館	上原昭一	東京大 学助教授	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大 学助教授	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女 子大学 教授	片桐洋一	大谷女子 大学教授	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	明治大 学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	東京大 学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女 子大学 教授	村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大 学名譽 教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水 女子大 学助教授	三木紀人	東京国立 文化財研究所	宮 次男	東京大 学助教授	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大 学教授	梶原正昭	東京国立 文化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立 大学教授	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	東京国立 博物館	高崎富士彦	東北大学 名譽教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	学芸院大 学学長	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大 学教授	山根有三	学芸院大 学学長	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学芸院女子短 期大学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教授	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	東京国立 文化財研究所	河野元昭	学芸院大 学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授	神保五弥	名古屋大 学助教授	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京学芸大 学助教授	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授	郡司正勝	名古屋大 学助教授	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説日本の古典15 井原西鶴

昭和53年5月20日 初版第1刷印刷

昭和53年6月3日 初版第1刷発行

著者代表——長谷川 強 ©1978

発行者——堀内 末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)230-6171

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653/郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙／カラー 王子製紙株式会社

モノクロ 日本パルプ工業株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかいたします。

0391-167015-3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

秋山 虔

国文学研究資料館長

市古貞次

学習院大学長

児玉幸多

早稲田大学教授

神保五弥

東京大学教授

山根有三

〈第一五巻・編集委員〉

埼玉大学教授

長谷川強

東京大学教授

山根有三

学習院大学長

児玉幸多

井原西鶴



集英社

目次

●カラー図版●『世間胸算用』表紙と序文／奥村利信筆「行水のをそく世之介」／『露殿物語』より「吉野太夫」／「独吟百韻自註絵巻」より「島原大門口」ほか／
通矢奉納額／『御船屏風』／「洛中洛外図屏風」／『太地浦捕鯨図』／『好色一代男』ほか刊本表紙／西鶴自筆発句短冊／自筆『西行花下偃息図』

●図版特集●

『西鶴自画賛十二ヶ月帖』 長谷川 強 22

西鶴・人と作品 長谷川 強 28

●図版特集●

西鶴文学の土壌―大坂 長谷川 強 41

住吉神社／大坂古地図と大阪市航空写真／『摂州名所絵図』 四天王寺 生玉神社 高津神社 誓願寺 西鶴墓

『好色一代男』―作品紹介 浅野 晃 48

『好色五人女』―作品紹介 浅野 晃 60

●図版特集●

西鶴作品の舞台 長谷川 強・浅野 晃 69

伏見・淀川の風景 瀬田の夕照／「近江名所図屏風」 厳島・天の橋立図屏風『伊勢参宮風俗図屏風』 江戸図屏風／『室津町絵図』 室津の風景／
『長崎日清貿易絵巻』 長崎丸山料亭花月

『西鶴諸国ばなし』―作品紹介 長谷川 強 76

『武道伝来記』―作品紹介 長谷川 強 82

『日本永代蔵』―作品紹介 長谷川 強 88

『世間胸算用』―作品紹介 長谷川 強 94

西鶴文学前後 浅野 晃 100

●図版特集●

三都の遊里 浅野 晃・小林 忠

『吉原風俗図巻』より／吉原古地図／『露殿物語絵巻』及び『洛中洛外図屏風』より六条三筋町遊里／島原古地図／『遊女八千代自賛像』／島原角屋／『川口遊廓図屏風』／新町古地図

二つの悪所と西鶴 浅野 晃

●図版特集●

光琳と上方町人の美意識 山根有三

『燕子花図屏風』中村内蔵之助像』立姿美人画』 扇面貼交手箱 住之江蒔絵硯箱 白地秋草模様描絵小袖 錆絵観鵜図角皿

上方の町人 児玉幸多

●図版特集●

経済生活の諸相 児玉幸多・郡司勇夫

生業（洛中洛外図屏風『都鄙図巻』 両替屋（両替店帳場模型 千両箱 看板ほか） 貨幣（慶長金・銀貨 元禄金・銀貨 銭貨ほか）

江戸時代の貨幣 児玉幸多

●図版特集●

師宣と浮世絵の確立 山根有三

『湯女図』『彦根屏風』『縄暖簾図』『若衆図』 師宣筆『見返り美人図』『男女相戯図』『北楼及演劇図巻』

風俗画から浮世絵へ 山根有三

●図版特集●

大和絵のこんげん 山根有三

『大和絵のこんげん』より『はづかしながら文言葉』ほか 『好色一代男』上方版・江戸版挿絵

書物の出版と普及 長谷川 強

西鶴作品解題 江本 裕

西鶴年譜 江本 裕

109

124

141

148

161

170

177

186

196

205

215

218

凡例

1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、各図版の解説に、その部分の執筆者があつたが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによつた。古文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3 江戸期の通貨単位、両・分・貫・匁等の価値は、現代の貨幣価格に換算して表示するには無理があるので、あえてそれを避けた。これについては本巻「江戸時代の貨幣」の章を参照されたい。

4 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

5 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。

6 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第一五巻・執筆者〉

埼玉大学教授

長谷川 強

共立女子大学教授

浅野 晃

名古屋大学助教授

小林 忠

東京大学教授

山根 有三

学習院大学長

児玉 幸多

日本貨幣協会副会長

郡司 勇夫

文部省教科書調査官

江本 裕

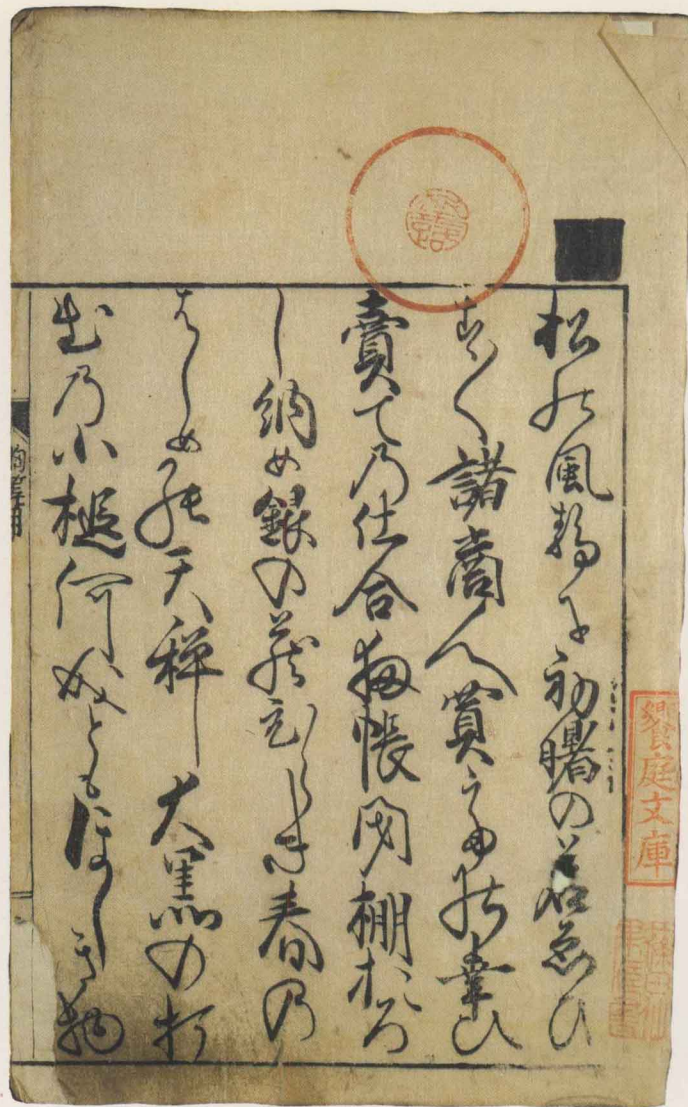
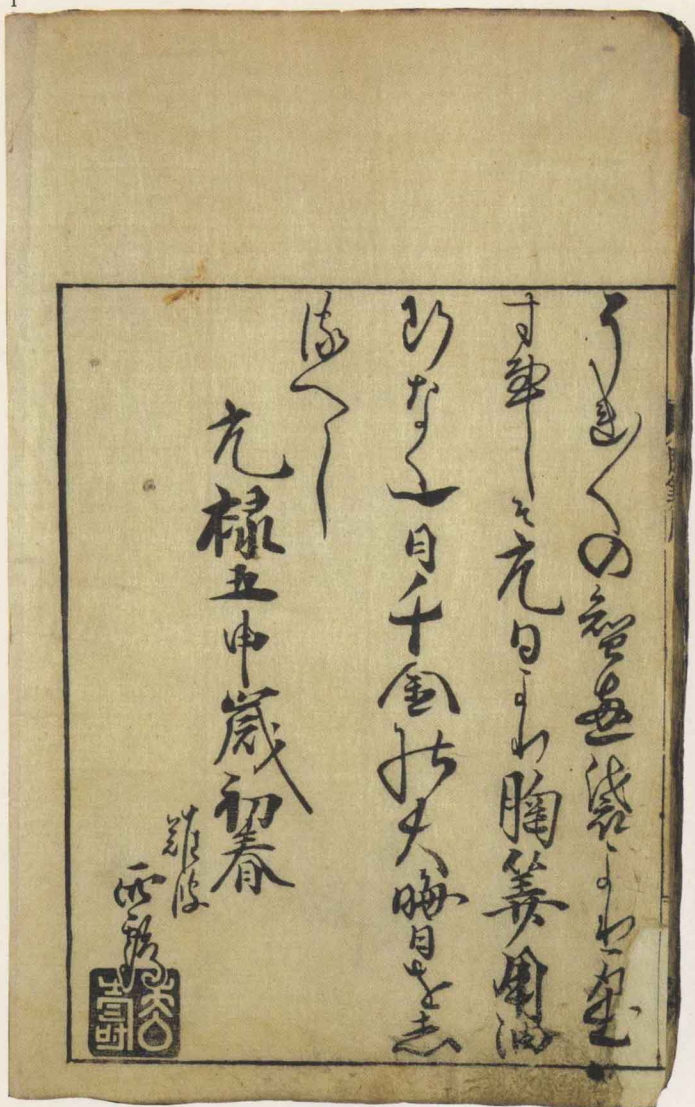
〈装幀〉

後藤 市三

〈レイアウト〉

宇喜多 邦嘉

樋口 英男



松の風静に初曙の若きひ
すく諸商人買ての幸ひ
賣ての仕合帳(さて)帳内棚おろ
し納め銀の蔵(くら)ひき春の
はじめの天秤大黒の打
出の小槌何成(なり)ともほしき物
それく(く)の智恵袋より取出
す事ぞ元日より胸算用油
断なく一日千金の大晦日をし
るべし

元禄五申歲(さるのとし)初春

難波

西鶴(松寿)

1 『世間胸算用』序文 2 同表紙
(巻三)——『胸算用』は西鶴最晩年の傑作で、序文は自筆版下(はんした)を刻み、晩年の筆蹟・署名をうかがうことができる。黒色表紙の本と茶色表紙の本があり、どちらが初印本か明らかでない。題簽(だいせん)に、「(絵入)世間胸算用 大晦日ハ一日千金三」とあり、書名の字体は各巻異なっている。大坂の伊丹屋、京の上村、江戸の万屋連名の刊記がある。／東京都・大東急記念文庫



3 行水より濡れの事——『好色一代男』巻1の3「人には見せぬ所」で、9歳の世之介が、遠眼鏡を持ち出して、5月4日の菖蒲湯の行水をつかっている下女を覗き見している場面は、奇抜な発想と表現によって注目を集めている。享保ごろには歌舞伎に仕組まれて人気を博したようである。江戸の浮世絵師奥村利信（生没年不詳）が描く役者絵は、世之介の市川升五郎と、下女役の袖崎菊太郎が演ずる舞台の様子を伝えている。『市川升五郎・袖崎菊太郎見立衆仙人』。／東京国立博物館

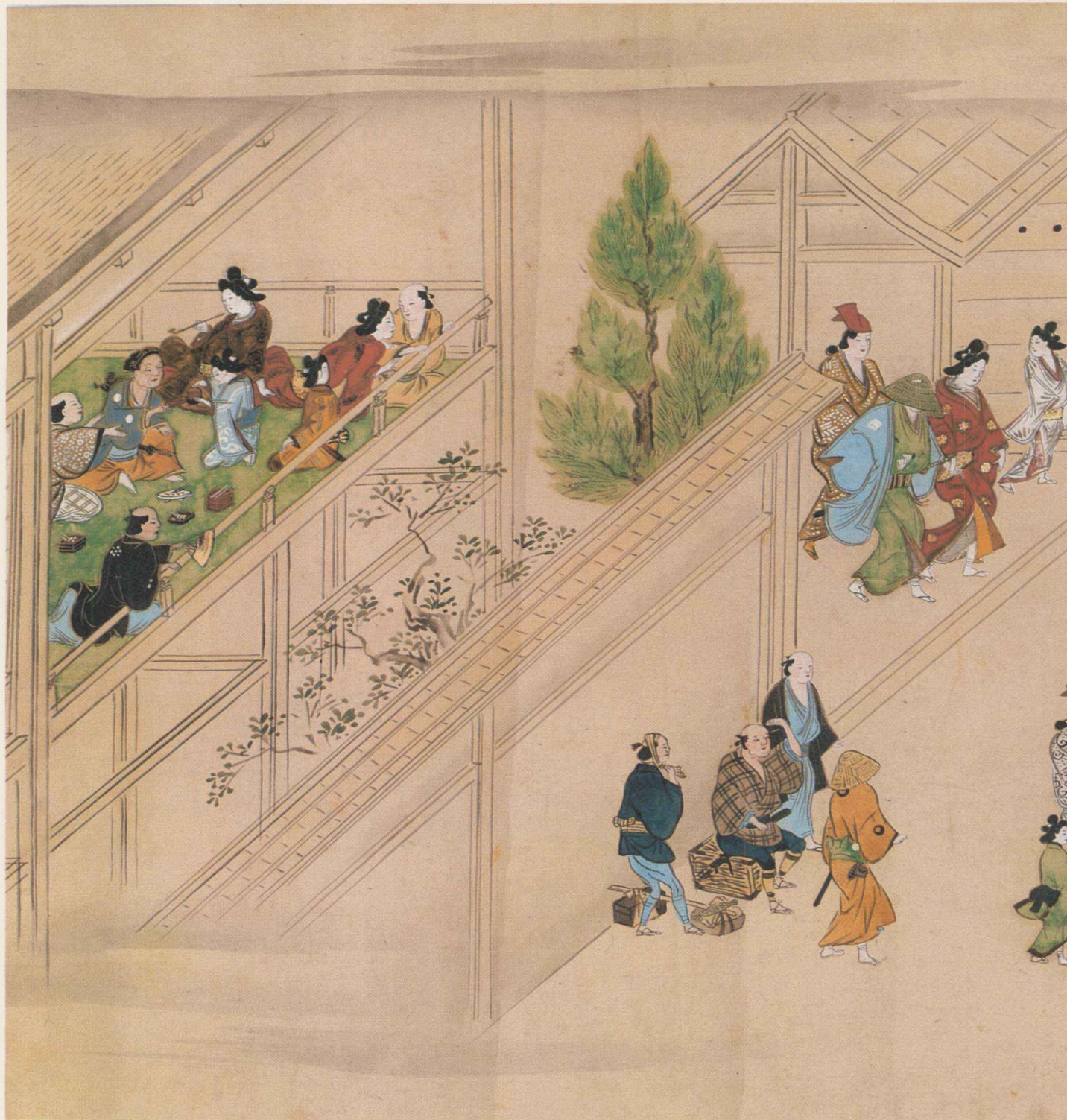




4 吉野太夫<『露殿物語絵巻』第25図部分>——『好色一代男』巻5の1「後には様つけて呼ぶ 吉野はこんばんの事」で主役を演ずる二代目吉野が、寛永初年に成立した絵巻物仕立ての仮名草子『露殿物語』に描かれている。朝顔の露の介が、都見物の帰途、六条三筋町の遊廊で吉野太夫と逢う場面である。吉野は寛永8年(1631)3月、近衛信尋公と競った灰屋紹益の妻となって退廊しているが、一世の名妓としての評判をほしいままにした遊女であった。／大阪府・逸翁美術館



『独吟百韻自註絵巻』は、紙高約三五センチ、全長一九〇センチに及ぶ卷子本で、絵一〇面を含んでいる。元禄五年（一六九六）秋の頃、西鶴が紀州旅行の時に成った「日本道に山路つもれば千代の菊」を発句とする独吟百韻に、自註と絵を加えたものである。絵も西鶴自画と伝えられていたが、最近、町狩野風の専門絵師の筆になるとの説が有力となった。百韻自註の部分と絵とは、別々に執筆され、二一紙に継ぎ合わされ、後に卷子として仕立てられたものである。西鶴の序によれば、もと貴人の依頼によって作られたものである。長く紀州に伝わり、文政七年（一八二四）豊田九右衛門という人物が紀州家に献上したもののようである。5・6・7図／奈良県・天理図書館



5 島原大門口——島原遊廓
にくりこむには、まず丹波口茶屋
町の茶屋で鞘間を従え、編笠を借
りうけ、大門までの朱雀の細道と
呼ばれた田圃路を行く。大門から
は引舟女郎が迎えに現われ、太鼓
女郎や揚屋の女房たちが華やかに
廊内に案内する。大門を入れば、
出口の茶屋、そこで一騒ぎの遊興
が始まるのである。大門の傍には
代々与右衛門と名のつた門番の姿
も描かれている。

6 難波堀江の芝居小屋——百韻の脇句「鶯鷗
も月に馴れてまね」に付けた第三句「役者笠秋の
夕に見つくて」には長文の自註を費して道頓堀の
芝居の盛況を語っている。嵐三右衛門座の紋を示す
幕と櫓(やぐら)が描かれており、橋を渡る先頭の役
者は、柏に巴(ともえ)の定紋から、若衆方の人気役
者鈴木平七である。また4人目の人物は、嵐三右衛
門の弟子の山下左衛門である。



7 塩の長次郎の手品——塩屋（塩売）長次郎は元禄期の著名な放下師（手品や曲芸を演じ、小歌などを歌う巷間芸人）。柳亭種彦（1783～1842）はその随筆『還魂紙料（すぎがえし）』において、太刀かたなは言うまでもなく、牛馬を吞む芸で人気を集め、元禄の頃には江戸にも下ったと考証している。もと大坂の塩屋九郎右衛門座の歌舞伎役者とも、また塩売を業としていた者とも伝えるが、『西鶴置土産』巻5の1「女郎がよいといふ野郎がよいといふ」にも手品芸人の名手としてこの人物の名が見える。百韻では、「魔法にもせよ不思議成隠れ箕」という自註の部分にある絵である。



8 星野勘左衛門通矢奉納額——京都の三十三間堂で、堂の一端から他端まで、一昼夜の間に射通す矢の数を競う競技が行なわれ、尾張藩士の星野勘左衛門は寛文2年（1662）に記録を作ったが、破られたので寛文9年再度記録に挑戦、その記念の奉納額である。「奉・掛御宝前所願成就処／通矢八千本／惣矢一万五百四拾二本／寛文九己酉（つちのととり）年五月二日尾州星野勘左衛門茂則敬白」。西鶴の矢数俳諧はこれを俳諧の上に移したものであり、西鶴当時は星野が記録保持者であったが、貞享3年（1686）紀州の和佐大八郎がこれを破った。／京都府・妙法院

9 『御船屏風(おふなびょうぶ)』部分——6曲1双。伊予国松山藩主久松定直が、自分の乗船に用いるために作らせた屏風。彼は其角門で俳諧をたしなんだので、京・大坂の俳人それぞれ15人の筆になる短冊28枚ずつをはって1双に仕立ててある。元禄3、4年ごろのものと推定されている。いかにも大名道具らしい金屏風であるが、格子の障子がはめこまれているのは、殿中とちがう船中所用のための配慮であろうが、しゃれている。図版は大坂の俳人の短冊をはった方の、第一扇～第五扇。



御船屏風・釈文

西鶴の句は第一扇三枚目と第四扇末

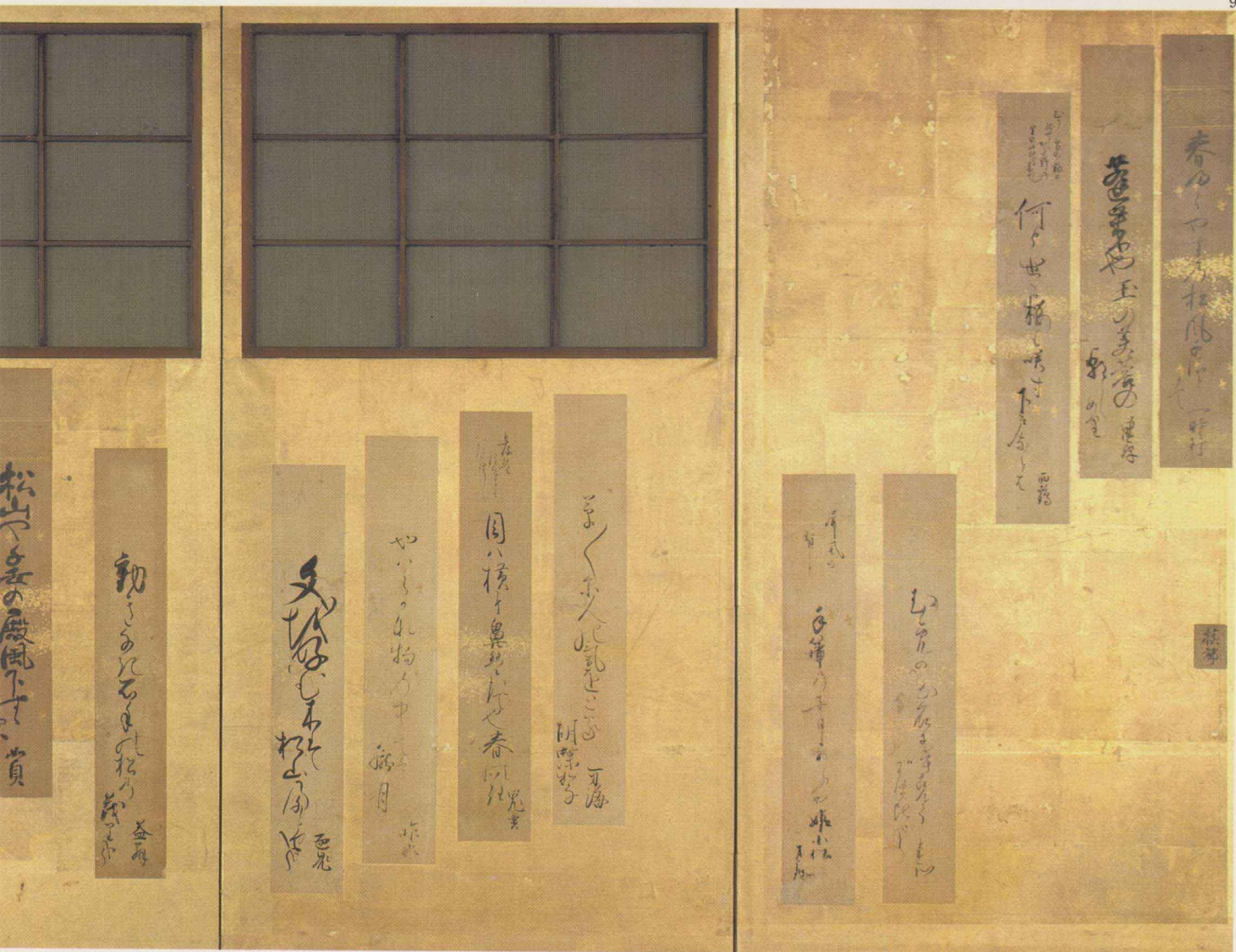
むかし男の歌（なが）め残せ
しかた野の里の花に來て／
何と世に桜も咲（か）ず下戸
ならば 西鶴
名月／父へ花酒の母也けふ
の月 西鶴

第一扇一枚目は西鶴のか
つてのライバル岡西惟中
の句

春ふくや寸の松風千さつま
一時軒

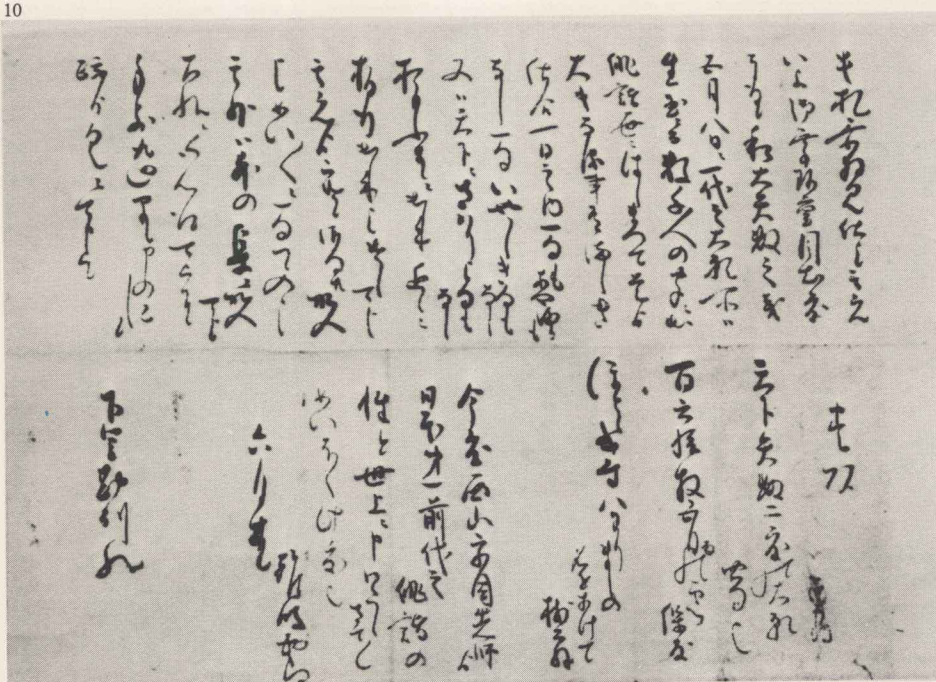
第二扇一枚目は上島鬼貫

孝はつくすともたらじ／目
ハ横に鼻はたて也春の花
鬼貫



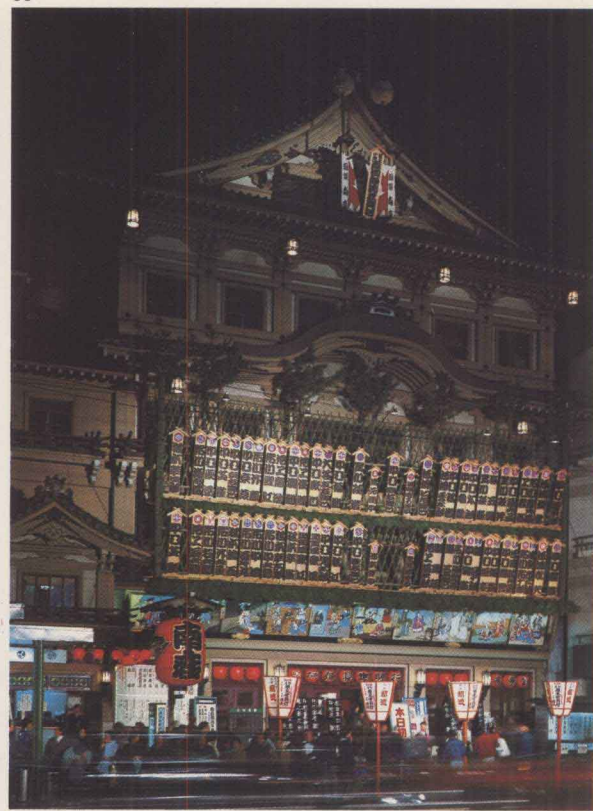
下里勤州宛西鶴書簡・釈文

貴礼忝(かたじけなく)拝見仕申候……
 (3)行目途中より) 私大矢数之義五月
 八日二一代之大願所へ生玉二而(て)
 数千人の聞二出俳諧世二はじまつては
 より大なる事有まじき仕合一日之内
 もなし又ハ天下ニさハリ申候もなし
 おもふまゝニ出来近々ニ板行出来申候
 遣(つかは)し可申(まうす)べく候其元
 より被遣(つかは)され候御句共加入申
 候……(下段初め) 巻頭 西鶴 天下
 矢数二度の大願四(十)句也……(下段
 中程) 今度西山宗因先師より日本第一
 前代之俳諧の性と世上ニ申わたしさて
 くめいばく此度也 難波西鶴 六月
 廿日 下里勤州様



10 下里勤州宛書簡——延宝8年(1680)6月20日付け。
 下里勤州は尾張国鳴海(名古屋市内)の酒造家下里勤兵衛、俳
 号を知足という。西鶴の手紙の伝えられるものは少ないが、
 知られるものの半数の3通まで知足あてのものである。本書
 簡は、この年5月7、8日の大矢数四千句成就を祝賀した知
 足の手紙に対する返事。宗因の日本第一の賞讃まで得た西鶴
 の得意さ、地方俳人にまで句を求めるという配慮——彼等と
 のつながりなどがうかがえよう。／奈良県・天理図書館





11 京都南座の顔見世興行——西鶴時代の芝居は、芝居を一年契約で抱え、年6回興行した。十月に一座の役者の入れ替えを行い、11月1日から新加入の役者の披露ということで、盛大に興行したのである。『世間胸算用』巻3の1「都の顔見世芝居」の章で、荒木与次兵衛一座が京都で興行した顔見世に集まった観客の様子が描かれている。往時の面影を残して、現在でも京都四条南座では顔見世興行が華やかに催されている。京都市東山区四条大橋東詰

12 四条河原の芝居小屋〈『洛中洛外図屏風』部分〉——四条通りや大和大路、細手通りにかけて六軒の芝居小屋が望まれる。京都の芝居小屋が整備されてくるのは、寛文年間のことであり、左端の櫓は、宇治加賀様の浄瑠璃の小屋であろう。そうすると、この景観は、延宝・天和の頃の四条河原の様子を描いたものとなろうか。／京都府・寂光院

